淑大看栄紀要 J.S.N.N.ShukutokuU Vol.12, P19-27, 2020

研究報告

ルーブリックを使用した管理栄養士養成課程における臨地実習の評価

内堀佳子　正木緑　本吉杏奈　山田晶世　平澤マキ　石井克枝　雀部沙絵　桑原節子
淑徳大学看護栄養学部

Evaluation of the field training component of dietitian course based on a rubric

Yoshiko Uchibori, Midori Masaki, Anna Motoyoshi, Akiyo Yamada,
Maki Hirasawa, Katsue Ishii, Sae Sasabe, Setsuko Kuwahara
School of Nursing and Nutrition, Shukutoku University

要旨

【目的】管理栄養士養成課程において、学生の臨地実習の事前事後の学修成果について到達度評価に適しているとされるルーブリックを用いて評価し、総合演習を含む事前事後指導の在り方を振り返る。

【方法】本校において設定された管理栄養士養成課程におけるルーブリックによる自己評価を臨地実習の事前と事後に実施し学修成果を分析した。

【結果及び考察】臨地実習前の評価では、3年生女性では、主体性及びコミュニケーション力を除いた4項目（課題設定・解決力、情報活用力、知識と情報の統合力、職業観）で評価規準3または4と評価した学生が少なく、知識と情報の統合力の評価規準を1と評価した学生が2割いた。3年生男性は、コミュニケーション力の評価は高いが、その他の5項目（主体性、課題設定・解決力、情報活用力、知識と情報の統合力、職業観）の評価が低かった。またコミュニケーション力以外の項目で3年生の女性と同様に評価規準4と評価した割合が低かった。4年生の女性は、知識と情報の統合力の項目を除いた5項目（主体性、コミュニケーション力、課題設定・解決力、情報活用力、職業観）について半数以上の学生が評価規準3または4と評価し3年生女性より評価規準が高かった。男性については、該当人数が4名と少ないが、すべての項目で評価規準2または3と評価し評価規準4と評価した学生はいなかった。

臨地実習後の評価については、3年生女性は課題設定・解決力が若干低かったが、それ以外の5項目について評価規準3または4と評価した学生が多くなり、3年生の男性は、主体性及び情報活用力以外の4項目について評価規準3または4と評価した学生が多かった。

4年生女性の事後評価では、評価基準の各項目において評価規準3と評価した割合が高くなり評価規準4と評価した割合が減少した。4年生の男性は主体性及び情報活用力を除いて全員が評価規準3または4と評価した。

どの項目も実習後の評価は評価規準3または4に評価した学生が増加し、その割合は6割強以上となり、管理栄養士として備えたい必要な力についておおむね獲得できたこと、本大学の学生は社会における管理栄養士としての資質（知識、技術、態度）についての理解が臨地実習後におおむね獲得できたという評価となり、今回用いた「管理栄養士課程における臨地実習　ルーブリック」により臨地実習の教育効果を可視化できたととらえることができた。

キーワード：ルーブリック、学士課程教育、臨地実習、自己評価、職業観
Key Words: rubric, baccalaureate degree program, field training, self-assessment, work values

Ⅰ　はじめに

2005年の中央教育審議会において、21世紀には、社会のあらゆる領域で新しい知識・技術の獲得力が活動基盤として重要となる知識基盤社会到来が予測されている。2012年には、予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を

育成する大学の教育の在り方が評議された。特に、学士課程教育の質的転換として、専門知識と汎用力能力を鍛えること、実習や体験活動など質の高い効果的な教育による知的な基礎に裏付けられた技術や技能を学ぶこと、生涯学ぶ習慣や主体的に考える力を持ち、どのような状況にも対応できる多様な人材を育成することが求められている。

淑徳大学・看護栄養学部・栄養学科・管理栄養士養成課程においても2014年から大学間連携共同教育推進事業「主体的学びのための教学マネジメントシステムの構築」において、学生の主体的な学びを促進する目的で学修成果の可視化を推進してきた。近年、関西国際大学が先駆けて開発したコモンルーブリックの活用、大学で教える人のためのルーブリックがカリキュラム評価に適している等の観点（佐藤，2015）から、淑徳大学教育向上委員会により、ルーブリックの開発が促進された。そこで、栄養学科では髙松ら栄養学科実習委員会による管理栄養士課程　臨地実習ルーブリックの開発、そして看護学科では小川が看護基礎教育における、全臨地実習に共通したルーブリックについて検討・開発・活用の取り組みが成された（髙松，2016）（小川，2017）。2014年度は臨地実習におけるルーブリック「管理栄養士課程における臨地実習　ルーブリック」（表－１）を試作、2015年度に施行し、臨地実習前後の評価について、同じ学生の比較ではないものの一定の評価があったと報告され（髙松，2016）、中嶋らはルーブリック導入における成果を「学生の意識付けと振り返りが効果的になる」との結果を導き出している（中嶋，2014）。

なお、本校における栄養学科の臨地実習の位置づけは、淑徳大学・看護栄養学部・栄養学科カリキュラム・ポリシーにおいて、知的活動や職業生活、社会活動において必要となる汎用的知識についての理解や、栄養学の学問体系の理解の基に、栄養学分野に関する基礎的な知識及び栄養の論理と実践の関係を理解し、これらを総合的に実践する応用能力を習得することとしている。また、日本栄養士会の提唱する臨地実習の教育目標は、実践活動の場での課題発見、解決を通して、栄養評価・判定に基づく適切なマネジメントを行うために必要とされる専門的知識及び技術の統合を図り、管理栄養士として具備すべき知識及び技能を習得させるとしていることから、管理栄養士の臨地実習は、実践の場での課題発見（気づき）、問題解決、専門的知識と技術の統合が目標となる（公益社団法人日本栄養士会，2014）。

そこで今回は、2016年度臨地実習対象の学生に、「管理栄養士課程における臨地実習　ルーブリック」による自己評価を実習前後に実施し、６つの評価規準を縦軸とし４つの評価基準の推移で到達度を明らかにした。

今回の調査の結果、2015年度に試作した本ルーブリックは、実習前後や項目間で明らかな差が見られ十分なデータが得られたことから、６つの評価規準の達成度を測るツールとして有用であることがわかった。しかし、使用したルーブリックは、大学及び教員側の評価規準を測るもので、学生自身の満足度や到達感など学生がその教科で何を期待してどのくらい満足したのか、また到達感を得ることができたかなどの学生側の評価規準は明らかになったと判断することが難しい。臨地実習の学生自身の満足度についての他大学における報告では、医学部教育における臨床実習での学生の満足度に独立して関連する因子としてスタッフの熱意、責任者の熱意、身体診察の頻度を指摘し、不満は指導医の接触がほとんどなかったことを挙げている（奥宮，2009）。また、大学生の学習意欲、大学生活の満足度を規定する要因について、教員とのコミュニケーションが学習意欲の向上や大学生活の満足度に影響を与えているとしている（見舘，2008）。

また、ルーブリックを使用した評価には学生事項評価と指導者評価の間にかい離がみられる学生が多いことも挙げられている（斎藤，2018）。

管理栄養士課程における臨地実習は社会を学ぶファーストステップであり、社会人としての意識を高める大切な経験であることを踏まえ、到達度の評価は満足度に通じているのかを明らかにする必要性があるのではないか。淑徳大学栄養学科の学生が４年間の大学生活について評価した満足度についての2018年の淑徳大学卒業時調査では、満足しているが20.6％、ある程度満足しているが

60.3％であり、やや不満が19％と回答した結果から本大学の他学科の学生の満足度より低い傾向にあったことがわかった。このことは、今後大学の評価及び将来の入学者数にも影響を及ぼす可能性があることから、各授業によるルーブリックによる学修成果のリフレクションに合わせて、学修成果の推移と各自が感じる満足度を明らかにしその結果を踏まえた授業・学習環境等を中心に検討するとともに、大学生活における環境などにも視野を広げて改善や見直し等の検討を行うことが大切ではないかと考える。

Ⅱ　対象と方法

1．調査対象

調査対象者は2017年度及び2016年度に入学した３年生及び４年生（前年度の実習に参加できなかった者）で、専門教育科目専門基幹科目区分である臨地実習受講者である。

対象人数は、女性82名（内訳３年生66名４年生16名）及び男性17名（３年生13名４年生４名）の合計99名である。なお、ルーブリック調査表に無回答、当日欠席及び不備のある者は除外し、女性73名、男性16名の合計89名を解析した（表１）。2018年度の対象者99名の実習先の内訳は、県及び市町村の施設での実習者61名、事業所、小学校及び保育所での実習者53名、病院での実習者99名である。

2．調査方法

ルーブリックを使用した臨地実習の事前調査については2018年６月の総合演習時間内の実習前のオリエンテーション時に、研究の趣旨を説明後、管理栄養士養成課程における臨地実習ルーブリックと依頼文を配布した。任意性の保証については、研究の目的として学生が臨地実習に臨む実習前後の考え方や感じ方について、ルーブリック用紙を使用して確認し、その結果を踏まえて授業の改善を行う目的としていること、研究に参加することによる利益と不利益について、また参加しなくても不利益を受けないことや履修科目の成績評価とは関係がないこと、研究対象者の権利については、この研究に参加するか否かは自由意志で決定でき、たとえ一度同意した後からでも同意を取り消すことができ、そのことで不利益がないことを口頭及び文書で説明を行った。回答後の用紙の提出は、回収ボックスを設置してその時間の終了までとした。また研究承諾は、研究のルーブリックの回収をもって得られたと判断することを依頼文に記載し、かつ口頭で説明を行った。

なお、臨地実習の事後調査については2019年１月の実習報告会終了後に事前調査と同様に行った。

今回使用した「管理栄養士課程における臨地実習　ルーブリック」は表２に示した通り、主体性、コミュニケーション力、課題設定・解決力、情報活用力、知識と学習の統合化、職業観の６つの評価規準を縦軸に、第１段階：理解し、行動しようとしている、第２段階：理解し、行動することができる、第３段階：積極的に行動ができる、第４段階：自分の考えを持ち、協働して積極的に行動することができる、を評価基準として横軸に設定したものである。６つの評価規準は、大学のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーに則った項目で、臨むべき学生像に到達しているか、何ができるようになったのかを明確にするもので、縦軸の６つの評価規準の評価は横軸の評価基準の３～４段階の自己評価により臨地実習の到達目標をある程度到達したと評価した。

表１．2018年度臨地実習におけるルーブリック評価対象者の有効回答数

	女性	男性	合計
調査対象者数（３年生）	66	13	79
調査対象者数（４年生）	16	4	20
欠席・無回答及び不備者数（３年生）	2	1	3
欠席・無回答及び不備者数（４年生）	7	0	7
有効回答者数（人）	73	16	89

表２．管理栄養士養成課程における臨地実習　ルーブリック

学籍番号　　氏名

評価基準 評価規準	4	3	2	1
主体性	実習の目的を理解し、積極的に行動をとるだけでなく、関連する事柄に問題意識を持ち取り組むことができる	実習の目的を理解し、積極的に行動をとろうとすることができる。	実習の目的を理解し、それに応じた行動をとることができる。	実習の目的を理解し、それに応じた行動をとろうとする。
コミュニケーション力（チームワーク力含）	場に応じた円滑なコミュニケーションをとり、リーダーシップ、フォロワーシップをとることができ、協働して実習を進めることができる。	人間関係の大切さを理解し、自分の思いや考えを適切に伝え、他者の思いや考えを理解するよう努めることができる。	人間関係の大切さを理解し、他社と協力して実習に取り組み、指導者と必要な意思疎通をとることができる。	人間関係の大切さを理解し、他者と協力して実習に取り組もうとしている。
課題設定・解決力	自ら課題を設定し、課題を分析し学習したことを生かして課題の解決に向けて検討し取り組むことができる。	自ら課題を設定することができ課題を分析するなど自分の力で最後までやりきろうとする。	与えられた課題を、自分の力で最後までやりきろうとする。	与えられた課題をこなそうとしている。
情報活用力（プレゼン力含）	実習を通して学んだ様々な活動の意義や現状を整理し、それについて自分の考えをまとめ、表現することができる。	実習を通して学んだ様々な活動の意義や現状を理解し、体得した情報を整理して表現することができる。	必要な情報を調べ、適切な情報を得ることができ、その結果をまとめて表現することができる。	解らないことを書物やインターネットにより調べたり、他者に質問することができる。
知識と実習の統合力	これまでに学んだ知識や科目実習を各分野の臨地実習と結びつけることができ、知識と臨地実習を統合して理解することができる。	これまでに学んだ知識や科目実習を各分野の臨地実習と結びつけることができ、理解を深めることができる。	事前学習で学んだ知識と実習での体験を結びつけることができる。	事前学習で学んだ知識と実習での体験を結びつけようとしている。
職業観	各施設の社会的役割、管理栄養士の役割について正しく理解し、将来の自分の仕事、姿を描くことに結びつけることができる。	各施設の社会的役割、管理栄養士の役割について正しく理解し、仕事を遂行するために必要な知識、技術、力などを理解することができる。	各施設の特徴、そこにおける管理栄養士の仕事について情報を得、正しく知ることができる。	各施設の特徴、そこにおける管理栄養士の仕事について知ろうとしている。

2014.11.20　栄養学科実習委員会作成

３．解析方法

収集したデータの統計学的処理は、Excel 2010を用い、管理栄養士課程臨地実習におけるルーブリックを使用した事前事後評価（図１）及びルーブリックの３・４段階をある程度の達成度に到達したと考え、学年別・男女別に分けた各グループにおいて評価基準３あるいは４の評価を回答した学生の人数と割合を集計した（表３）。

４．倫理的配慮事項

本研究は、淑徳大学倫理審査委員会の承認を得て（承認番号F18−01）実施した。

研究依頼書には、「匿名性・個人情報の保護」「任意性の保証」「予想される利益・不利益」「研究の講評」について記述し、併せて口頭での説明を実施することで不利益を被ることがないことを十分に説明した上で実施した。

Ⅲ　結果

今回の調査対象者数は99名で、そのうち、無効回答、欠席者、不備等を除いた合計89名を分析対象とした（表１）。この「管理栄養士課程における臨地実習のルーブリック」（表２）の作成にあたり、学生が備えたい必要な力について、臨地実習を経験することにより獲得したい力を自身が意識化することができ、学生と教員の双方が到達度を確認できることを目的として掲げられており、その主旨に従って実習前後でどのように評価が変化したのかについて特に注目した（髙松，2016）。ルーブリックの試行については、2014年

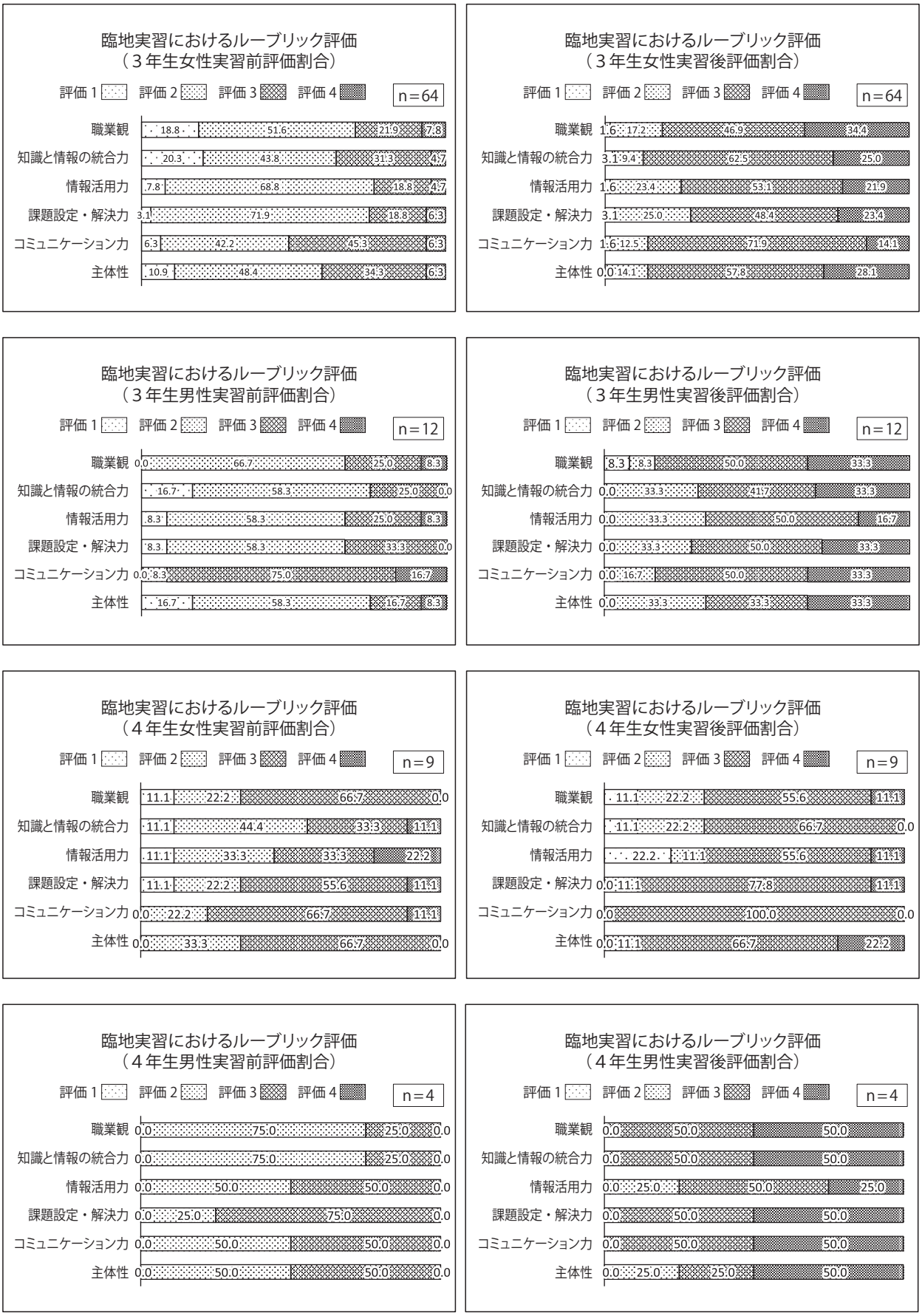

図１．管理栄養士課程臨地実習におけるルーブリックを使用した事前事後評価

表３．管理栄養士臨地実習ルーブリックを使用した評価で３または４と評価した割合の実習事前事後での推移

学年/性別/人数	評価時期	主体性	コミュニケーション力	課題設定・解決力	情報活用力	知識と情報の統合力	職業観
３年生女性（n=64）	事前	40.6	51.6	25.1	23.5	36.0	29.7（%）
	事後	85.9	86.0	71.8	75.0	87.5	81.3
３年生男性（n=12）	事前	25.0	91.7	33.3	33.3	25.0	33.3
	事後	66.6	83.3	83.3	66.7	75.0	83.3
４年生女性（n=9）	事前	66.7	77.8	66.7	55.5	44.4	66.7
	事後	88.9	100.0	88.9	66.7	66.7	66.7
４年生男性（n=4）	事前	50.0	50.0	75.0	50.0	25.0	25.0
	事後	75.0	100.0	100.0	75.0	100.0	100.0

度における実習終了後の事後到達度と2015年度における実習に臨む前にその時点での自己の到達段階を評価した結果として、臨地実習の経験を通し、管理栄養士としての必要な力を現場から学び成長していることが確認できたとしている。

今回のルーブリックを使用した評価結果について、臨地実習の実習前と実習後の評価で、評価規準の６つの項目と評価規準の評価を性別、学年別に示した（図１）。

臨地実習前の評価では、３年生女性では、主体性及びコミュニケーション力を除いた４項目（課題設定・解決力、情報活用力、知識と情報の統合力、職業観）で評価規準３または４と評価した学生が23.5％～36.0％で、知識と情報の統合力の評価規準を１と評価した学生の割合が20.3％となり、すべての評価基準で評価規準４と評価した学生は4.7％～7. 8％と少なかった。３年生男性は、コミュニケーション力の評価基準３または４と評価した割合が91.7％と高く、その他の５項目（主体性、課題設定・解決力、情報活用力、知識と情報の統合力、職業観）では25.0%～33.3％であった。また主体性、課題設定･解決力、情報活用力、知識と情報の統合力、職業観で評価規準２と評価した割合がおおよそ60％程度となり、コミュニケーション力以外の項目で３年生の女性と同様に評価規準４と評価した割合が低かった。

４年生の女性は、知識と情報の統合力の項目を除いた５項目（主体性、コミュニケーション力、課題設定・解決力、情報活用力、職業観）が55.5％～77.8％と半数以上の学生が評価規準３または４と評価し、４年生の男性については、該当人数が４名と少ないものの、すべての項目で評価規準２または３と評価し評価規準４と評価した学生はいなかった。

臨地実習後の評価については、評価規準３または４と評価した学生は３年生女性が、課題設定・解決力と情報活用力が若干低かったがそれ以外の４項目について80％以上が評価し実習前評価より評価規準が１段階から２段階上昇していた。３年生の男性は、主体性、情報活用力及び知識と情報の統合力以外の３項目について80％以上が評価し３年生の女性と同様、実習前評価より評価規準が１段階から２段階上昇していた。４年生女性の評価は、評価規準３と評価した割合が66.7％～100％となったが、事評価規準４と評価した割合が減少した。４年生の男性は評価規準３または４と評価した学生が主体性及び情報活用力を除いて100％となった。

どの項目も実習前の評価と実習後の評価を比較すると評価規準３または４に評価した学生がおおむね６割強以上となり、備えたい必要な力についておおむね獲得でき、本大学の学生が社会における管理栄養士としての資質（知識、技術、態度）に対しての理解がおおむね獲得できたという評価となり、今回用いた「管理栄養士課程における臨地実習　ルーブリック」により臨地実習の教育効果を可視化できたととらえることができた。

次に、実習ルーブリックを使用した評価で３または４段階をある程度の達成度に到達したと考え、学年別・男女別に分けた各グループにおいて評価基準３あるいは４と回答した学生の人数と割合を集計し比較した（表３）。臨地実習前の評価

では、評価基準３または４と評価した割合は、主体性について３年生女性で40.6％、男性で25.0％、４年生女性は66.7％、男性は50.0％で、３年生と比較すると４年生の評価が高い傾向があった。コミュニケーション力は、３年生女性51.6％、男性91.7％、４年生女性77.8％、男性50.0％と３年生女性と４年生男性が若干低かった。解決設定・解決力は、３年生女性は25.1％、男性33.3％、４年生の女性は66.7％、男性75.0％と４年生が高い傾向が見られた。情報活用力は、３年生女性が23.5％、男性は33.3％、４年生女性が55.5％、男性が50.0％とやはり４年生が高い傾向が見られた。知識と情報の統合力は、３年生女性は36.0％、４年生女性が44.4％、３年生男性と４年生男性は25.0％と男性に比較し女性のほうが高い傾向が見られた。職業観については、３年生の女性が29.7％、男性が33.3％、４年生の女性が66.7％、男性が25.0％となった。以上から特に主体性、情報活用力、知識と情報の統合力、職業観の評価基準について、実習前の時点では学生が備えたい力として到達していない学生が多いと評価できた。

実習後評価では、評価基準３または４と評価した割合は、主体性について３年生の女性が85.9％、４年生の女性で88.9％、３年生男性で66.6％、４年生男性は75.0％となった。コミュニケーション力は３年生の女性で86.0％、男性で83.3％、４年生の女性及び男性で100％となった。課題設定・解決力では３年生の女性は71.8％、男性で83.3％、４年生女性は88.9％、男性は100％となった、情報活用力は３年生女性で75.0％、男性で66，7％、４年生女性で66.7％、男性で75.0％と他の評価規準より評価基準３または４と評価した学生が少ない傾向となった。知識と情報の統合力は３年生の女性が87.5％、男性が75.0％、４年生女性が66.7％、男性が100％となった。職業観は３年生女性が81.3％、男性が83.3％、４年生女性が66.7％、男性が100％となった。以上から主体性と情報活用力の伸びが若干少なく、コミュニケーション力と職業観については学生が備えたい必要な力を獲得できたと評価でき、臨地実習の経験を通し管理栄養士としての必要な力を現場から学びある程度成長していることが確認できた。

2018年度の総合演習の事後演習として、公衆栄養分野及び給食経営管理分野において、初めての試みとしてポスターによる報告会を開催した。また、全員が対象となる臨床栄養学分野はオーラルによる報告会を開催した。この報告会については、総合演習においてポスター発表の基本を学習し、各自が取り組んだ実習内容について何を報告するか、どのように報告するかについて自ら考えポスターまたはパワーポイントにまとめ、２～４年生に対して発表するものである。この報告会は、実習後の学生にとって、ルーブリックで設定した評価規準の自己評価の向上につながる機会として設けたが、今回のルーブリックによる評価のうち、情報活用力が評価規準３または４と評価した率が66.7～75.0％、同様に主体性については66.6～88.9％と若干低い割合に留まった。この報告会は淑徳大学栄養学科　ディプロマ・ポリシーでは、第１大項目の第３項に相当するが第１項第項目は社会の構成員としての基本的知識・技能・態度として、社会生活で必要となる汎用的技能及び社会の一員として求められる態度や志向性を身に付けているとともに、人類の文化、社会と自然に関する知識について理解している、という内容を掲げている。この項目の総仕上げの取り組みとして今後も問う実習を継続していく方針であるので、情報活用力と主体性の獲得については次年度以降の授業における指導内容と指導方法の改善にあたって特に重視すべきと考えられる。

現在の栄養士教育は、講義、実験実習、学内校外実習等、多くの科目を履修し、自己学習の時間も限られている。その中で職業意識、コンピテンシー能力の向上を図るためにもアクティブ・ラーニングの授業スタイルを積極的に導入し、より効果的な方法と工夫を図り学生が能動的に取り組む環境を整えることを考えたい（白尾，2018）。

Ⅳ　考察

「管理栄養士課程における臨地実習のルーブリック」の実習前評価では３年生女性でコミュニケーション力以外の５項目（主体性、課題設定・解決力、情報活用力、知識と情報の統合力、職業観）で評価規準１または２と評価している割合が59.3

～75.0％、3年生の男性は主体性以外の5項目（コミュニケーション力、課題設定・解決力、情報活用力、知識と情報の統合力、職業観）66.6～75.0％と評価している割合が高かったことから、実習前の到達度は低い傾向であった。また、4年生女性は、知識と情報の統合力以外の5項目（主体性、コミュニケーション力、課題設定・解決力、情報活用力、職業観）で評価規準1または2と評価している割合が22.2～55.5％と3年生より評価が高くなったが、いずれも臨地実習での学びや体験により事後評価では評価規準が1段階から2段階上昇していたことから、学外実習での実戦能力を培う機会は管理栄養士として貴重な機会であったことは認められるが、より多くの知識や技術を体得するための準備として事前授業である総合演習の内容及び進め方についてさらに充実、検討する必要があると思われる。また、臨地実習における指導者からの評価として時折、学生の取り組み方がやや消極的であることを指摘されることがあるが、このルーブリックによる自己評価において主体性の項目の伸びが少ない傾向が見られたことから、学外の指導者からの評価を真摯に受け止め、主体性の評価が低い学生の力と自信を育てる学習方法として、現在導入しているアクティブ・ラーニングを取り入れた授業についてより効果的な方法の工夫と導入を、そして学生が能動的に取り組む環境整備を図りたいと考える。

今回の研究では、単純集計によるルーブリックによる実習前後の自己評価の伸びを全体として分析した結果、3年生及び4年生の女子で、事後評価の評価規準が事前評価のそれより低く評価した学生が数名存在していた。このことについて考察すれば、臨地実習に臨み現役の管理栄養士の活動や他大学の学生との交流等を体験したことで、事前の自己を振り返り到達すべき力の設定目標を高くしたことにより、事後の評価が事前評価より低くなったのではないかと考えられ、この評価は評価規準の後退ではなくむしろ今後の「伸びしろ」として期待できることと捉えたい。いずれにしろ学生が将来管理栄養士として実際の業務を体験し、自身が社会で活躍できる見通しと自信に繋がっていく機会となることが重要と考える。

V　結論と今後の課題

本研究では、淑徳大学の3年生及び4年生が臨地実習と事前事後学習の位置づけである総合演習の評価について、ルーブリックの評価規準であるコミュニケーション力、課題設定・解決力、知識と学習の統合力、職業観の4項目で、学生の8割以上が評価規準の3または4と評価し、臨地実習における学修成果は向上が認められたことが明らかになった。

このことは、「管理栄養士過程における臨地実習　ルーブリック」による評価を実習前後で実施することで、臨地実習の教育効果が可視化できたと捉えられる。ルーブリックによる評価は臨地実習の教育効果についてカリキュラムの改善等の目的として導入できるが、今回の結果ではその目的には及ばなかったことから管理栄養士課程の臨地実習を臨床栄養分野、給食経営管理分野、公衆栄養分野別に評価するなど事前事後評価のタイミングの検討及び個別面談等の実施により学生個人の評価をより詳細に分析、そして、臨地実習施設及び指導者による指導方法や評価との差異を明らかにする等、今後の課題としたい。

また、この「管理栄養士課程における臨地実習ルーブリック」による評価は、大学及び教員側の評価規準を測るものであることから、学生自身の満足度や到達感など学生がこの臨地実習に何を期待してどのくらい満足したのか、また到達感を得ることができたかなどの学生側の評価規準は明らかにならなかった。このことについては渡邉らも課題として挙げていることから（渡邉，2019）、今回の研究における対象学生の卒業時の満足度、就職後の満足度や定着率などに関する追跡研究を行いその結果をルーブリックそのものの評価に反映させるという将来の展開も視野に入れて次の4つについて今後の課題とし取り組んでいきたい。

(1) 評価規準の情報活用力と主体性を持って臨む態度の獲得について、事前事後学習にあたる総合演習を中心にアクティブ・ラーニングを取り入れたカリキュラムの検討
(2) 各授業のルーブリックによる学修成果を明確にするとともに、学修成果を獲得したことと

関連した学生自身の満足度を明らかにし、授業・学習環境等の検討

(3) (2) の満足度に関連した、授業、学習環境以外の、大学における生活環境等の評価の明確化と卒業時、就職後の満足度及び定着率などの把握

(4) 臨地実習実施施設及び指導者による指導方法や評価基準の差異と学生の学修到達度、満足度などの関連の把握

VI

本研究において記載すべき利益相反は存在しない。

引用・参考文献

見舘好隆，永井正洋，北澤武，他（2008）．大学生の学習意欲，大学生活の満足度を規定する要因について．日本教育工業会論文誌，32（2），189−198.

中嶋一恵，浦川末子，白石景一，他（2014）．ルーブリックを使用した学外実習評価規準の作成について．長崎大学短期大学紀要，38，102−107.

公益社団法人日本栄養士会，一般社団法人全国栄養士養成施設協会編（2014）．臨地実習及び校外実習の実際（2014年版）．平成31年5月10日アクセス，http://www.dietitian.or.jp/assets/data/.../h26rinchi-ma00all.pdf

小川純子（2017）．平成24年度「大学間連携共同教育推進事業」選定取組．主体的な学びのための教学マネジメントシステムの構築．文部科学省．平成24〜28年度最終報告書，131−141.

奥宮太郎，森本剛，中島俊樹，小倉健紀，他（2008）．臨床実習における学生の満足度に関連する因子の検討，医学教育，40（1），65−71.

斎藤トシ子，伊藤直子，渡辺優奈，他（2018）．臨地実習の評価を考える〜ルーブリックの試み〜．第6回日本栄養学教育学会学術総会，24.

佐藤浩章，（2015）．大学で教える人のためのルーブリック入門．シンポジウム「大学教育における『書く力』どう測る　どう伸ばす　−ルーブリックの活用と課題−」．津田塾大学小平キャンパス.

白尾美佳，（2018）．栄養士養成科目における教育方法の検討について．帝京短期大学紀要，（20），205−212.

髙松まり子，（2016）．50周年特別企画．栄管理栄養士課程・臨地実習のルーブリックの開発．淑徳大学看護栄養学部紀要．（8），13−18.

渡邉隆子，髙橋律子，大原和幸，他，（2019）．栄養士課程のルーブリック評価の導入．第66回日本栄養改善学会学術総会．2P−188.